

に言い、待っていると云われた。ベティさんは故郷のカナダのアルバータ州に帰った。その後 1963 年から 1967 年の 5 年間はインドネシアは共産主義のスカルノ時代を迎え、アメリカ人には一人もビザが下りない時代が続いた。その間に大学 3 年生のジョンさんはカナダからスピーチをしに来たベティさんに会う。ジョンさんが大学 4 年生の秋に結婚。最初はテキサスにできた新しい教会の主任牧師 (pastor) として赴任する。その後 2 ~ 3 年してからインドネシアへ赴任する。ジョンさん自身は初めは南アフリカに行くつもりだった。しかしベティさんから島の人々が待っているという話を聞いて 2 人でニューギニアに行くことになった。2 人はスカルノ時代が終って最初にビザが下りたアメリカ人であった。島の人々は大喜びで 2 人を待っていて歓迎し、もし帰ると言いでもしたら、石の壁を築いて帰してくれないような雰囲気だったという。

ベティさんの話では、言葉を教えるのは初めは大変だったそうだ。彼女は部族の言葉を学んだ。そして部族の人々とジョンさんとの間に立って通訳兼調整役 (coordinator) として働いた。部族の人々は男性優位の社会なので男を立てる。ある問題についてジョンさんの意見を聞くと部族の人々がベティさんに言う。ジョンさんは言葉も何も分からないのですべてベティさん任せであるが、彼女は「ジョンは ~ だと言っている」と部族の人に伝えたそうだ。お互いに助け合っとうまくいったのである。そして 2 人はインドネシアのニューギニアのイリアン・ジャヤ (Irian Jaya) の山の中で 10 年、ワメナ (Wamena) で 20 年、その他の地域も含め合わせて 35 年を過ごすのである。

5 宣教師活動とニューギニアの暮し

ニューギニアとはどんな島なのか。「死の病原体プリオン」(リチャード・ローズ著)の中からその紹介の文章を載せてみたい。

ニューギニアは地球上に残された最後の未開地である。獰猛な原住民が住んでいることはよく知られており、探検家も避けていた場所である。ミクロネシアの住民たちも、その近くで難破すると、対岸を目指して泳いで逃げるといふ。この島は世界でグリーンランドに次ぐ大きい島である。長さ 2400 キロ、幅 600 キロ、西太平洋にあって、赤道のすぐ南、オーストラリアの北、スマトラとボルネオの東に位置している。恐竜のような形をしており中央山系がその背骨にあたる。

熱帯性の沿岸はマングローブが繁殖する湿地帯で埋めつくされ、さらにヒルが群がる熱帯雨林が山岳地帯への侵入を妨げている。原住民はメラネシアンである。背は低いが筋肉質で、黒く縮れた毛髪を有し、石器時代と変わらない原始的な漁撈、狩猟、農業に従事している。数千のグループに分かれ、たがいに争いを続けている。言語的にも数百以上に分かれており、この島だけで、世界の言語の半分を占めるといわれている。

私にはニューギニアと聞いてもどこか南方の未開の土地で槍を持った原住民の人々の姿くらいしか想像できなかった。最初、インドネシアに宣教に行ってみたと聞いてバリ島かなと思った。ニューギニアだと言われて初めてインドネシアにニューギニアがあることを知ったと言う恥ずかしさ。ニューギニアならパプア・ニューギニアだと頭に閃いてそれを口にしたら、パプア・ニューギニアはインドネシアではないと言われた。地図を見せてもらってやっと分かった。ニューギニアはオーストラリアの北にある大きな島でおまけにそれがインドネシア領とパプア・ニューギニアとに真ん中で真っ二つに分かれている。山や川などの自然の地形で分けられずに、人為的に真ん中で直線で分けられている。アメリカに来てニューギニアのことを知ったのは私にとって新鮮な出来事であった。また蛇足ではあるが、脳がスポンジと化し、感染すれば、痴呆、けいれんの末に 100% 死に至る奇病がパプア・ニューギニア内陸部のある部族の食人の習慣を持つ人々にみられた病気であった。1950 年頃この病気が発見されて研究調査が始まっている。クールーとよばれるこの